

生きるにしても、死ぬにしても

ピリピ人への手紙 1 章 19-26 節

はじめに

召天者記念礼拝は、先に天に召された方々を覚えつつ、神様を礼拝する時です。また、先に亡くなられた方々はどこに行ったのか、私たちはやがてどこに行くのか、そして私たちは残された命をどのように生きるべきかを、改めて考える時でもあります。

今日は、1 世紀に小アジアやヨーロッパにキリスト教を広めた使徒パウロの人生観や死生観から、私たちにとっての「生きること」また「死ぬこと」について考えたいと思います。

1. パウロの願い

今日の聖書箇所 20 節で、パウロはこう言っています。「**私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。**」

パウロの願いは、「生きるにしても死ぬにしても」、自分を通して「キリストがあがめられること」でした。多くの人たちは、「生きるにしても死ぬにしても」、「自分があがめられること」を願うのではないのでしょうか。自分が人々に覚えられ、認められ、評価されることを願うのが、私たち人間の姿ではないのでしょうか。私たちは、そのためにこそ一生懸命生きているとも言えると思います。

しかしパウロは、「生きるにしても死ぬにしても」、大切なのは「自分」ではなく、「キリスト」であると言うのです。自分が人々に覚えられ、認められ、評価されるよりも、イエス・キリストが人々に覚えられ、信じられ、あがめられることを願ったのです。パウロの人生にとっては、自分よりもイエス・キリストが大切であり、パウロの人生の主役は、自分ではなくイエス・キリストであったとも言えると思います。

2. パウロの人生観

だからこそパウロは、21 節でこのように言います。「**私にとって生きることはキリスト、死ぬことも益です。**」パウロにとって「生きることはキリスト」だと言うのです。パウロの人生を一言で言うなら、それは「キリスト」だと言うのです。パウロにとってイエス・キリストは、人生そのもののなのです。

というのは、パウロはガラテヤ人への手紙の中でこのように言っています。「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくだ**

さった、神の御子に対する信仰によるのです」(ガラテヤ 2:19-20)。

パウロは、自分はイエス・キリストとともに十字架につけられたと言います。つまりパウロは、イエス・キリストを信じた時に、自分は一度死んだのだと言うのです。イエス・キリストを信じた時に、自分は死んで、自分の中にイエス・キリストが生きようになったと言うのです。

パウロは、イエス・キリストを信じた時に、自分が人生の主演であることを止めたのです。そして、自分の人生の主演をイエス・キリストに明け渡したのです。ですから、自分の人生は、「自分の欲望」に従って生きるのではなく、「イエス・キリスト」に従って生きようになったのです。そして「自分の夢や目標」に向かって生きるのではなく、「イエス・キリストから与えられた使命」に生きようになったのです。

何がパウロをこのように変えたのでしょうか。それは「信仰」です。パウロを愛し、パウロのために十字架で死なれた、神の子であるイエス・キリストに対する「信仰」です。「信仰」こそが、パウロの生き方そのものを変えたのです。

3. パウロの死生観

信仰は、パウロの「生き方」だけでなく、「死」に対する考え方も変えました。パウロは、「死ぬことも益です」と言っています。パウロは死ぬことを恐れていません。パウロにとって死ぬことは、「よいこと」だったのです。パウロにとっては、「生きること」よりも「死ぬこと」のほうが「望ましいこと」だったのです。

23 節でパウロは、「**私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです**」と言っています。パウロがなぜ「生きること」よりも「死ぬこと」のほうを望んだのか、その理由は、「死ぬこと」は「世を去ってキリストとともにいること」だからです。

イエス・キリストは今、天におられます。私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目によみがえられた後、天に昇って行かれました。イエス・キリストを信じる人は、地上の生涯を終えて、死を迎える時、イエス・キリストがおられる天に迎えられ、あらゆる労苦から解放放たれて安らぐことができるのです(黙示録 14:13)。私たちの教会から先に天に召された方々も、今はイエス・キリストとともにおられ、あらゆる悲しみ、苦しみから解放放たれて、完全なる安らぎに包まれているのだと思います。

4. パウロの葛藤と決断

パウロにとって、「生きるとはキリスト」であり、「死ぬことはキリストとともにいること」なのです。23 節でパウロは、「**私は、その二つのことの間で板ばさみになっています**」と言っています。パウロにとっては、「生きること」も「死ぬこと」も両方とも魅力的だったのです。どちらも魅力的だったので、パウロは 22 節で「**どちらを選んだらよいか、私には分かりません**」とまで言うのです。

私たちの多くは、「生きること」と「死ぬこと」のどちらか一つを選ぶのではないでしょう。か。「死ぬこと」が怖いから「生きる」、あるいは「生きること」が辛いから「死ぬ」というように、どちらかを否定して、一つを選ぼうとするのではないかと思います。しかしパウロは、「生きること」も魅力的であり、「死ぬこと」も魅力的だったのです。また逆に、「生きること」を恐れていなかったし、「死ぬこと」も恐れていなかったのです。パウロは、「生きること」も「死ぬこと」も、両方を喜んで選ぶことができたのです。

しかしパウロは、24-25 節でこのように言います。**「しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためにはもっと必要です。このことを確信しているので、あなたがたの信仰の前進と喜びのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてとともにいるようになることを知っています」。**

パウロはこの手紙を書いた時、投獄されていました。ですからいつ処刑されるかわからない状況でした。しかしパウロは、このまま処刑されても構わないと考えていたのです。なぜならパウロにとって死ぬことは、「キリストとともにいること」だからです。パウロは自分のことだけを考えれば、「生きること」よりも「死ぬこと」のほうを望んでいたのです。しかしそれは、「生きること」が辛いからとか、「生きること」に疲れたからではなく、「死ぬことはキリストとともにいること」だからです。

しかしパウロは、「死ぬこと」よりも「生きること」を選んだのです。なぜなら自分が「生きること」は、ピリピ教会の人々の信仰の前進と喜びのためになると考えたからです。パウロは、自分のことだけを考えれば、「死ぬこと」を望みました。しかしパウロは、人々のことを考えて、「生きること」を選んだのです。パウロは決して、「死ぬこと」が怖いから「生きること」を選んだわけではありません。人々のために、「生きること」を選んだのです。

パウロにとって「生きること」は、決して自分のためではありませんでした。パウロにとって「生きること」は、人々のためであり、人々がキリストをあがめるようになるためでした。

おわりに

パウロにとって「生きることはキリスト」であり、「死ぬことはキリストとともにいること」でした。パウロは、「生きること」も「死ぬこと」も恐れませんでした。どちらをも喜んで選ぶことができました。パウロをそのようにしたのは、イエス・キリストに対する「信仰」です。イエス・キリストに対する信仰が、パウロの「生き方」を変え、パウロから「死」の恐怖を取り除いたのです。イエス・キリストに対する信仰は、私たちの人生観を変え、私たちの死生観を変えます。何を信じるかによって、私たちの「生き方」が変わり、私たちの「死」の捉え方が変わるのです。イエス・キリストは神であると信じることも「信仰」であり、イエス・キリストは神ではないと信じることもまた「信仰」です。そのどちらを信じるかによって、私たちの人生観と死生観に大きく、また決定的に変わるのです。ぜひ皆さんには、真剣に自分の「信仰」を問うてみていただきたいと思います。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちはしばしば「生きること」に疲れ、「死ぬこと」を恐れます。私たちはそのどちらも選ぶことができないことがあります。しかしパウロは、「生きること」にも「死ぬこと」にも喜びを抱き、「生きること」も「死ぬこと」も恐れませんでした。それは、パウロにイエス・キリストに対する「信仰」があったからでした。どうか私たちにも「信仰」を与えてくださって、その「信仰」が、「生きること」にも「死ぬこと」にも大きな力を持つものにしてください。私たちが「信仰」によって、「生きること」にも「死ぬこと」にも恐れることなく、喜びと希望をもって歩めるようにしてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。